

『流れ星が消えないうちに』

橋本 紡／著 新潮社（2006年）

恋人だった加地の突然の事故死から奈緒子は玄関でしか寝れなくなっていた。そして、親友だった川嶋も彼の死を受け止められずにいた。二人はいなくなった人から貰った言葉や時間が忘れられず、立ち直れずにいた。やがて緩やかに時が流れ、奈緒子と川嶋は加地が高校の文化祭の時に作って、奈緒子に預けていたプラネタリウムを玄関までひっぱりだしてきた。玄関に星々を映し出し、加地が作った流れ星に二人は願いをかけた。

『稲垣足穂 飛行機の黄昏』

稲垣 足穂／著 平凡社（2016年）

稲垣足穂は明治33年生まれの小説家です。小学校に通っていたころから飛行機に強いあこがれを持つようになり、それから天体にも興味を抱くようになりました。文学と科学の両方に深い知識を得た人でした。本文中の「横寺日記」には足穂がいかにか天体に触れていたのかがよくわかります。なぜ星座を覚えようと思ったのか、また、天文学についての数多くの通俗書に対する批判など、本当に星空が好きなのだと感じられる1冊になっています。

『1等星からたどる 誰でも探せる星座』

浅田 英夫／著 地人書館（2011年）

かつて、人は星と星を結ぶ線で形をつくり、名前をつけ、星座をつくりました。星座にはそれぞれ物語があり、神の話、人の話、動物の話など、夜空を眺めればそこに見つけることができます。この本では、星の見つけ方・探し方と、星座の歴史、星座にまつわる物語などが紹介されています。星は季節や場所によって見え方が違いますが、自分で星座を探ることができたら、宇宙の壮大さと、人間の歴史やいとなみを感じることができますね。

『三軒茶屋星座館』

柴崎 竜人／著 講談社（2013年）

三軒茶屋星座館は和馬がひらくプラネタリウムで、おんぼろ雑居ビルの7階にある。開店時間は、夕方7時から朝方まで。午前零時を過ぎると、酔っ払った客や終電を逃した客が来ることも多い。ある日、10年間ほとんど連絡をとっていなかった弟・創馬が、小学生の娘・月子を連れてやって来たので、家族としての共同生活が始まった。

急に一緒に住むことになった3人と星座館を訪れる個性的な客達の心のふれあいが描かれた物語です。

『野尻抱影 星は周る』

野尻 抱影／著 平凡社（2015年）

野尻抱影は、星へのあふれる情熱を、科学からではなく、文学からアプローチした天文随筆家です。冥王星の名付け親として有名です。本書は読み手の想像力をかき立てる美しい随筆が収録されています。例えば、白鳥座の星である「アルビレオ」の語感については「夜 鶯 の啼く南国の星月夜に、小さい紅い唇から囁かれそうな名」と書いています。星のきれいな冬の季節に、抱影とともに夜空を見上げてみませんか。

『今夜、流れ星を見るために』

星空さんぼ編集部／編 誠文堂新光社（2013年）

みなさんは流れ星を見たことがありますか？流れ星って不思議な魅力がありますよね。普段はなかなか見られなくても上手に見る方法があるんです。流れ星を上手に見るために必要なものはなんでしょうか。入念な準備？運？たしかにどちらも必要なものではあります。この本を読むと流れ星を見られる確率がぐっと上がりますよ！季節ごとの流星群や星の種類、カメラでの撮影方法など初心者の人にもわかるように解説します。

